



美術館は、都市を活性化させる

PHOTOGRAPHS BY TAKESHI SHINTO TEXT BY NOBUKO SUZUKI

六本木ヒルズ10周年を記念して、10月16日から18日の3日間にわたり六本木アカデミーヒルズで開催されたグローバルカンファレンス「Innovative City Forum」。未来のライフスタイルにおける美術の役割とは何か。セッション「創作的都市と生活の未来」の中で南條史生 森美術館館長が世界的な知性に投げかけた、美術館のあり方とは、都市を革新させる機能とは。

セッションでは、森美術館館長の南條史生氏がモデレーターとして、世界の最先端の現場で活躍する4人から、さまざまなヒントを引き出した。

ニューヨーク近代美術館では、インターネット上でオンラインの学習講座を開催したり、来館者が利用できる音声ガイド機器によってソーシャルネットワークのコミュニティを広げたりしている。ラウリイ館長は「美術館は今、都市に対する関係性を変えている。デジタルメディアや館外での展示などで美術館の壁を壊し、人々の体験のなかに美術館を組み込んでいこうという一連の動きが、美術館自体のエネルギーともなっている」と語った。

ロンドンのテート・モダンには、2000年に開館した当初は、中心部にありながら工業地帯の発電所跡という立地で、周囲は荒涼としていた。その後、徐々に美術館を中心とした再開発が進み、一帯に人が住みはじめ、店舗やカフェが並び、森や果樹園のある街並みへと変化していった。セロータ館長は、「昨年、館内の発電用の石油のタンクがあった場所を、インスタレーションやパフォーマンスに使える場所にした。この十年以上の間に来館者も増えて、建物の拡張を考えている。テート・モダンは、美術館自体だけでなく、美術館が直接的に都市に影響を与えられる事例となった」と、その成果を報告。

また、MITメディアラボ所長としてデジタル世界における

イノベーションを追求する伊藤穰一氏は、「インターネット環境で育ってきた子どもたちは、われわれとはまったく異なる脳を持ち、認知モデルも変わってきている。私たちが柔軟で新しい社会のシステムを今構築しないと、子どもたちが成長したときに生きやすい社会が準備できない」と課題を提示。

医学博士にして国会の福島原発事故調査委員会委員長も務めた黒川清氏は、「今、世界の人口の半分が都市に住んでいる。生まれた時からタッチパネルに触れて育った子どもたちは、右脳左脳のどちらで都市の空間を創造していくのか」と問う。

南條館長の「美術館がこのまま都市の内部やネットワーク上に広がっていけば、やがてその存在は必要なくなってしまうのではないか」という問いに対しては、パネラーから、やはり中核となる施設がなければ都市を変革することはできない、都市にある種の化学変化を起こす触媒となるのが美術館なのだ、という答えが出た。ネットや新しい情報技術がもたらすグローバルな影響力は重要になっていくだろうが、それはその中心に美術館があることなのだ。なぜなら、美術館は実体験をリアルに提供する場であり、その結果、いつも人が集まる中心となるからだ。人が集まる場所こそ、創造性や文化が生まれる。美術館がよりよい街づくりに貢献する機会、今後ますます増えていくだろう。

写真右上から時計回り—黒川 清(政策研究大学院大学アカデミックフェロー)、グレン・ラウリイ(ニューヨーク近代美術館館長)、伊藤穰一(MITメディアラボ所長)、ニコラス・セロータ(テート館長)、南條史生(森美術館館長)

六本木ヒルズ10周年記念国際会議

Innovative City
designing life for future **Forum**

Innovative City Forumとは

六本木ヒルズがオープンして10年。この機会に世界を代表するオピニオン・リーダーを迎え「都市とライフスタイルの新しいデザイン」を課題にした3日間にわたるフォーラムが繰り広げられた。テーマは、先端技術、創造産業、都市政策。そこから見えて来た人間社会の可能性とはどのようなものだったか。

●一部セッションは下記URLにて配信

youtube.com/user/InnovativeCityForum